

▼オピニオン

「知ってほしい」より「知りたい」が共感を生む

シビルNPO 連携プラットフォーム 理事
一般社団法人 Water-n 代表理事

奥田 早希子



「土木を知ってほしい」に感じる違和

筆者は記者として、20年近く水インフラを外側から見つめてきた。そして、今は見つめる対象が、その他のインフラ、土木に広がっている。とはいえ、やはり立ち位置は変わらず、業界内部ではなく、業界に近い外側だ。だからだろうか、時々感じる違和がある。

業界内部で活動をする人たちは、面白いように同じことを言う。

「土木を知ってほしい」

「下水道を知ってほしい」

時には「下水道を知るべきだ」という発言まで飛び出す。

そこに違和を感じ続けている。「僕のことを見て見て見て」というのは幼い子どものようだし、「俺のことを知るべきだ」に至っては、「何様のつもりだ」と突っ込みたくなる。

このような、「自分のことを知ってほしい」という思いだけでは、情報や感情を相手に押し付けるだけに陥りやすい。

自分と相手がいた場合、まず「相手のことを知りたい」という思いが大切ではないだろうか。これは、友人、恋人、職場など人間関係を構築する上でも、とても大切なことだ。

長らく記者活動をしていると、取材がうまくいくこともあれば、うまくいかないこともある。成否を分けるのはテクニックや知識などではなく、取材対象である人物や新技術などを知りたいという思い。それが筆者が行きついた答えだ。

相手のことを知り、自分との共通点を探し、そこから共感を生み出そうとする。そうなったとき、相手と自分との間に双方向に感情が流れ始める。

研究論文で裏付けをとっているわけではないが、多くの方が経験上、首肯していただけるのではないだろうか。

土木を主流化することの限界

「土木と市民社会をつなぐ」活動においても、同じことがいえる。「土木を知ってほしい」という気持ちで進めると、情報や感情を土木から相手（市民社会など）に押し付けてしまい、一方通行となり、市民社会の共感を得にくいことが危惧される。

実は同じように、市民社会に概念や施策などが浸透しない事例は多くある。先日、生物多様性に関する研究会取材した際、委員として出席されていた国立環境研究所の研究者も、「生物多様性を主流化したい気持ちは分かるが、生物多様性を広めようとするのはいずれ立ちいかなくなる」と述べていた。

まさにその通り、土木に当てはめてもその通りだと手を打った。生物多様性を「土木」に置き換えると、こうなる。

「土木を主流化したい気持ちは分かるが、土木を広めようとするのはいずれ立ちいかなくなる」

では、どうすればよいのか。そのヒントについても、その研究者の発言が筆者の考えていたことと合致した。

「すでに社会で主流になっていること、例えば経済、健康などと連携し、そこに生物多様性を取り込んでもらい、生物多様性があることで経済が回る、健康でいられるというストーリーを見せてはどうか」

この示唆を具体例に当てはめてみよう。業界ごとの展示会があると思う。水インフラなら下水道展という一大イベントが毎年行われており、市民に知ってほしいということで、下水道展に小学生を招いて

いる。これは「下水道を主流化しよう」という発想で、いずれ立ちいかなくなる可能性が大きい。

そもそも BtoB の展示会のコンセプトと小学生はかけ離れていて、趣旨がぶれると感じたため、筆者は、「すでに一般の人が多く訪れて主流化しているエコプロに下水道のブースを出展する」ことを提案した。

結果的に今も継続して下水道のブースはエコプロに出展されている。しかし、展示内容が「下水道を知ってほしい」になっている点は、まだまだ改善の余地がある。

ちなみに筆者が代表理事を務める一般社団法人 Water-n が年に2回発行している『水を還すヒト・コト・モノマガジン「Water-n」』では、主流化されている事象に排水処理を当てはめている。

例えば、「DENIM」「OUTDOOR」「cosmetics」など、学生が関心を持ちそうな（主流化されている）オシャレや美容、遊びなどを入り口として、デニムやコスメ製造で出た排水処理の話、キャンプ場の汚水処理の設備などへと導線を引いている。おしゃれや遊びの話と読んでいたら水の勉強になった、そんな編集を心掛けている。

最後に

「土木を知ってほしい」と「相手（市民社会など）を知りたい」という時のそれぞれのポジションチェンジを、矢印で整理しておく。

「土木を知ってほしい」という時は、土木から情報を発信するため「土木→相手」のように思えるが、土木のポジションに相手を引っ張ってきて取り込もうとしているのだから「土木←相手」となる。（図1）

「相手を知りたい」という時はその逆で、土木が相手のポジションに寄って行く「土木→相手」となる。（図2）

「土木←相手」は土木に相手を合わせようとするイメージだし、「土木→相手」は相手に土木が合わせようとするイメージを分かっただけなのではないだろうか。そして、後者の方が相手の共感を生みやすいということに、否を唱える人はいないのではないだろうか。

土木と市民社会をつなぐには、「土木を知ってほしい」ではなく、「相手（市民社会など）を知りたい」という思いこそ大切にすべきであると提言したい。

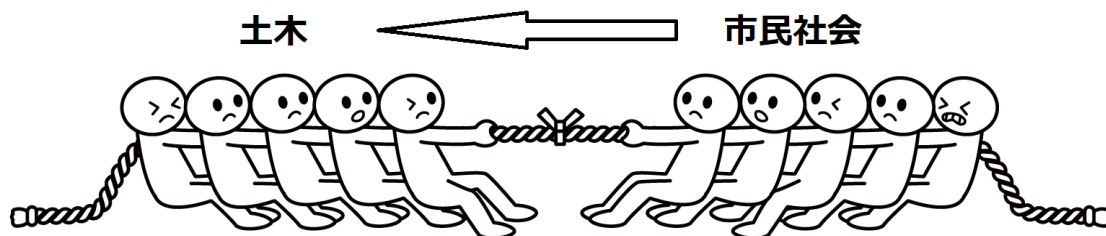


図1 「土木を知ってほしい」ということは、相手（市民社会など）を土木のポジションに引っ張り込もうとすること。引っ張り合いになってしまう

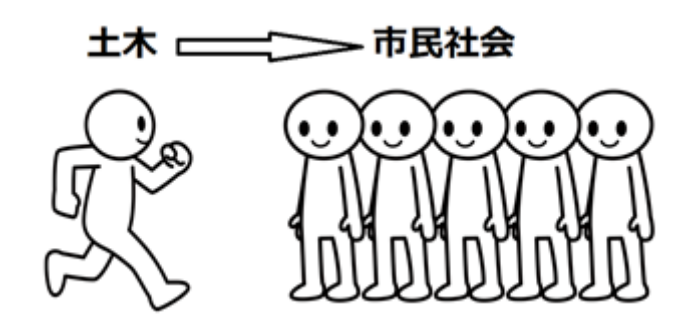


図2 「相手（市民社会など）を知りたい」ということは、相手（市民社会など）のポジションに土木が寄っていくこと。共感が生まれやすい